

その十八 一以って貫く

いつだったかの地区協議会で、「ロータリーには、四つの奉仕部門があるが、職業奉仕を除いた方がいいと思う」と発言しましたら、かなり大勢の方が賛成でした。職業奉仕を、社会奉仕、国際奉仕、クラブ奉仕と一緒に並べて、四大奉仕と呼ぶことに抵抗を感じている会員も多いということですね。

欧米では「四」という数字が好まれるようです。「四大奉仕」「四つのテスト」「ロータリー綱領四ヶ条」みな「四」です。なにも四つでなくてもいいのですけれどもね。ロータリーも三大奉仕でよかったのですが、四つにしたばかりに、四大奉仕といって、「職業奉仕」を入れなければ格好がつかなくなってしまうでしょう。

ロータリーは「職業奉仕」の団体ですから、これはむしろ別格にして、会員がどんな奉仕活動を考える場合も、常に「職業奉仕」を念頭に置くべきです。四大奉仕などというところに並べるものですから、職業奉仕委員会でもなにか活動しなくてはいけないような気がして、やれ職業指導とか、優良従業員の表彰などという考えが浮かんでくるのです。

136

社会奉仕でも、国際奉仕でも、クラブ奉仕でも、本当はそれぞれ奉仕の基本にちゃんとした考えといえますか、基本となる哲学といってもいいかもしれませんが、それが「職業奉仕」なのですから、なにもしるやることが、どんどん拡大して広がっていくものですから、基本となる考えは少々おろそかになっても、奉仕活動さえ間違いなく実施されていさえすれば、それで問題は起こりません。

ところが、「職業奉仕」といいますのは、ロータリーという組織の、よって立つ基本理念なのです。例えば、日本の国は、天皇を「象徴」という曖昧なことばでごまかしてはいますけれども、正しくは「立憲君主国」で「民主主義」を国是としているといえるべきです。会社には社是があるのと同じです。それと同じように、「職業奉仕」というのは、ロータリーがよって立つ基本理念なのですから、「職業奉仕」を他の三つの奉仕と並べるのは、はじめから無理な話なのです。

私が、「職業奉仕を四大奉仕から除けよう」といってみましたのも、他の三つの奉仕部門と並列するのは止めてしまえという意味で申しあげたので、なにも「職業奉仕が不要だ」ということではありません。私の考えに賛成者が多かったのは、四つの奉仕部門を

並列で論じるのに反対だと考える会員が、多かつたからに他なりません。

ロータリーのPR用パンフレットには、いまから十数年前までは、「ロータリーは職業奉仕を理念とする団体である」と書いてありました。ところが一九九九年（平成十一）、時のRI会長C・ラビッツアさんのとき「ロータリーは国際奉仕の団体である」と変わりました。「これで、ロータリーは滅びた」という会員がいるくらい、この地区でも問題になりました。ところがラビッツアRI会長が書いたものをよく読んでみますと、職業奉仕を決して無視してはいません。よいロータリアンを保つ為には、ロータリーの会員が減少してもやむを得ないとまでいつているのです。「よいロータリアン」とは、「職業奉仕」を自らの生活信条としている会員という意味です。ラビッツアといえば、彼がRI理事のとき日本のロータリーが、セントルイス宣言を存続させようとするのを側面から援助した人です。物事はある一面だけを見て判断してはいけませんね。

「職業奉仕」を四大奉仕の一つなどとするものから、理屈をこねるだけでなく、何か行動を起こすということになります。だから、実際に奉仕活動のプロジェクトとして、優良社員の表彰だとか青少

138

年の職業相談をやらなくてはいけない、ということになるのです。決議二二三―三四条には、職業奉仕はロータリーの哲学ではあるけれども、理屈だけでは駄目だ、行動しなければいけないと書いてあるものですから、青少年のために職業相談をするのが行動だ、と短絡します。するとまたやかましい会員が出て、「永年勤続表彰や職業相談は、社会奉仕だ。職業奉仕ではない」といい出します。

厳密にはそうでしょうし、そのような議論をするのも、ロータリーの楽しみの一つではありますけれども、あまりやかましくいわないで、いいことはおやりになるのがいいと思います。

「職業奉仕」とは、職場例会が職業奉仕委員会の計画だなどと、一々職業奉仕委員会が、持ち出すものではなく、常に会員のころのなかにあるものですから、ことさらなんの行事をやらなくても、それでいいではありませんか。

よく、「ロータリーの原点―職業奉仕」などという文を見かけることがありますけれども、ロータリーの原点は「クラブ会員の利益の増大」で、「職業奉仕」というのは、会員が考えに考えて到達した究極の思想といってもよいものです。しかしよく考えてみますと、会員の事業の安定なくして、「職業奉仕」もなにもありません。井坂PGも「慈善事業に

「浮き身をやつすな」といつているではありませんか。

もう十年以上まえになりましようか。「職業奉仕は、クラブの責任である」といわれて、一騒動起こったことがあります。これも職業奉仕についての理解やPRをクラブの責任で進めてくださいということで、至極当然のことですが、職業奉仕は個人の問題で、クラブに責任を持つとは何事かという議論になったのです。

「論語」里仁篇に次の章句があります。

子曰わく、参よ、吾が道は一^い以てこれを貫く。曾子曰わく、唯。子出ず。門人問いて曰わく、何の謂ぞや。曾子曰わく。夫子の道は忠恕^{ちゆうじよ}のみ。

(里仁第四―15)

孔子と孔子の弟子曾参、曾参と門人との問答です。先ず、いまの言葉に直しましょう。

ある時孔子が、曾参はじめ門人たちのいる部屋で、こういった。

「参よ、私の道はただ一つのことです。貫かれています。曾参が、うやうやしく答えた。

「おっしゃる通りでございます」

140

孔子は、満げに頷いた。やがて孔子は部屋を出て行った。部屋にいた弟子たちは、二人の短い問答を聞いて、何のことか分からない。ある門人が、曾参に尋ねた。

「大先生がおっしゃったのは、どういう意味なのですか」

それに対して、曾参は次のように答えた。

「先生の道は、常に忠恕^{ちゆうじよ}、つまり『まごころ』と『おもいやり』とで貫かれていますということだよ」

「忠」は「おのれのまごころ」「恕」は「他人に対するおもいやり」です。孔子は、人を見て法を説くという言葉をそのまま行つた人で、「論語」を読んでみますと、同じ質問をしているのに、違う弟子に全く反対と思われるような答えをしていることがありますから、戸惑う弟子もあつたはずですね。曾参は孔子の高弟で、孝経を書いたといわれているくらいの人ですから、孔子のいうことは、ツーカーで伝わつたでしょう。その弟子と孔子との短い問答が、他の門人たちに通じなかつたのです。

「一」とは「忠恕」です。「まごころ」と「おもいやり」です。ロータリーでは、よく「寛容」といいます。そして、この間も職業奉仕カウンセラーの佃さんが、「ロータリーは寛容のこころ。即ち『恕』

だ」といつておられました、その「恕」です。

「自分はこれまでいろんなことを、やったり、いつたりしてきたけれども、一貫しているのは唯一つ、『恕』であるぞ」というのが、孔子のいいたかったことです。曾参は孔子お気に入りの弟子ですから、孔子のことは、チンといえばカンと応えるくらいよく分かります。それでこんな問答になりました。

ロータリー・クラブにも、ロータリーのことならなんでもというベテラン会員がいるでしょう。新会員は、ただベテラン会員の話を黙って聞いているだけでなく、分からないことは、積極的にどんどん質問して、聞いてください。

会員A 「ロータリーの道は、ただ一つで貫かれて
いる」

会員B 「その通りだ」

新会員 「『ただ一つの道』とは、一体何ですか？」

会員A 「職業奉仕の道だ」

と、こういう問答だと、簡潔にして明快ではないですか。

ただし一言付け加えておきますけれども、「一以って貫く」というのは、「原理主義」ではありません。現実の変化を見ようとはしないで、古い考えに

142

固執すると、イスラムの原理主義になります。日本のロータリーにも、原理主義めいた考えがないとはいえません。孔子の「一以って貫く」というのは、きわめて柔軟な行動原理なのです。
ポール・ハリスも「教条主義は駄目だ」といつてい
るではありませんか。